令和８年度第３回中央区高齢者施策推進委員会
会議記録

名　称	令和８年度第３回中央区高齢者施策推進委員会
日　時	令和８年８月 28 日（金）18：30～20：00
場　所	中央区役所本庁舎８階大会議室
出席者	〔委員 17 名〕下線は欠席 和気康太（委員長）、望月孝裕（副委員長）、葛岡真彦、戸所綾子、 鈴木禎、中村守、菅野佐百合、上野双葉、橋本雅子、八木英之、小磯幸子、 中村幸子、祖父江由美、上田勉、遠藤龍雄、保田奈奈、生島憲、大久保捻、 田部井久、河合江美 〔事務局〕 高齢者福祉課長、介護保険課長、保険年金課長、住宅課長、高齢者福祉係長、 高齢者活動支援係長、高齢者サービス係長、介護保険課管理係長、 事業者支援給付係長、介護認定係長、地域支援係長、高齢者健康支援係長、 指導担当係長、高齢者福祉係主査、介護保険課管理係主査
傍聴者	０名
配　布 資　料	〔説明資料〕 ・高齢者施策の方向性 〔机上資料〕 ・中央区高齢者施策推進委員会委員名簿 ・第３回中央区高齢者施策推進委員会座席表 ・中央区高齢者の生活実態調査及び介護サービス利用状況等調査報告書、同（概要版） ・中央区高齢者保健福祉計画・第９期介護保険事業計画（令和６年度～令和８年度） ・高齢者福祉事業のしおり ・介護保険べんり帳

議事要旨

１　開会
事務局より、本日は傍聴人が０名、議事録の作成について説明。

２　議題

(1) 高齢者施策の方向性
事務局より、資料（高齢者施策の方向性）について説明。

【和気委員長】
保健医療福祉計画の基本理念には「つながり」という文言が入っているが、本計画においては「つながり」を基本理念にどう位置づけるのか。また、「支え合い」の担い手を誰にするのかという点は整理が必要と考える。地域住民だけを担い手とすると、地域活動に参加する一部の人に負担が偏ってしまう可能性がある。そのため、担い手となる人を支える仕組みや、活動に参加する入口を作ることも必要である。

【事務局】
区では単身高齢者が増えており、平時だけでなく有事の際に助け合うという意味でも、「つながり」は重要である。他方、「支え合い」という言葉の中に「つながり」が含まれていると推察しており、過去の計画から受け継いできている基本理念のため、引き続き踏襲していく。

【小磯委員】
腕の骨折をきっかけに体力が落ちたが、区のフレイル予防の体操に３か月参加したところ、体力が大きく改善した。フレイル予防の大切さを実感したので、身近な地域で取り組める場を増やすとともに、地域の取組に参加するきっかけづくりも大切である。

【中村幸子委員】
父が亡くなった後、母が外出しなくなったことをきっかけに、支援について学ぶため元気応援サポーターの講習を受け、現在は通いの場の活動をしている。民間企業の定年が 60 歳から 70 歳に引き上げられ、仕事を続ける高齢者が増える中、ボランティアの担い手が減っている。ボランティアに参加しやすい仕組みづくりが必要である。

【祖父江委員】
訪問介護の仕事をしながら、現在は両親の介護もしており、自分が家族介護者の立場になって、区のサービスや「互いに支え合う」ことのありがたさを実感している。また、母の介護を支えるため、娘夫婦も中央区に転居し、若い世代とのつながりの心強さも感じている。今後は、若い世代にも中央区の魅力を伝え、住み続けたい、戻ってきたいと思えるまちにしていくことも重要である。

【和気委員長】
地域活動は、担い手がいなくなることを過度に気にするのではなく、新しい人が入ってくることが大切である。仕事などで一度離れても、また戻ってこられるような環境をつくり、ワークライフバランスも考慮し活動を支援していくことが必要である。

【戸所委員】
調査結果で医療と介護の連携に関する数値が下がっている点が気がかりであった。現場では、入院や施設入所などをきっかけに、それまでの地域での支援体制やつながりが途切れてしまうことがあるため、医師会としては、支援が途切れないよう、支援シートを作成して継続的に状況を確認できる体制を構築していく。

【保田委員】
目標５の若年性認知症に関する相談支援について、東京都若年性認知症総合支援センターでは年齢や診断名などによっては相談の対象にならない場合があり、制度の狭間にいる方の相談先が分かりにくい状況となっている。そのため、窓口の周知だけでなく、その人の状況に応じてどこに相談すればよいのか、認知症ケアパスなども活用して分かりやすく示していくことが必要である。

【和気委員長】
共生型サービスは、障害と介護の連携という点で重要であるが、全国的にもあまり広がっていない状況である。若年性認知症など制度の狭間にいる方を含め、個々の機関だけに任せるのではなく、都と区がしっかり連携して支えていくことが大切である。

【上野委員】
自宅でできるだけ長く暮らしたいという高齢者は多いが、在宅医療はどの程度進んでいるのか。また、在宅生活を支えるための施策はあるのか。
民生委員などが訪問しても拒否されることがあり、特にマンションでは顔を合わせること自体が難しく、地域とのつながりを作りにくい状況である。サロンなどへの参加も男性は少なく、担い手不足もあるため、まずは高齢者と地域がつながるきっかけをどうつくるかが課題である。

【事務局】
在宅医療がどの程度進んでいるか、数値で表すことは困難である。また、自宅でできるだけ過ごしたいという希望にも応えられるよう、本人の意見を丁寧に聞きながら、引き続き支援を行っていく。
さらに、介護をする方が仕事を辞めたり、負担を抱え込んだりすることがないよう配慮しながら、できるだけ本人や家族の希望に沿った支援をしていくことが大切である。

【和気委員長】
高齢者福祉は、施設中心から在宅介護・在宅医療を重視する方向へ大きく変わり、在宅で受けられるサービスも充実してきた。最期まで自宅で過ごしたいという希望に応えられるよう、ターミナルケアも含め、在宅介護・医療体制をさらに充実させていくことが大切である。

【橋本委員】
月に１度、高齢者クラブの活動で、地域の高齢者と食事をしながら近況報告をするなどの交流をしている。こうした活動が参加者の楽しみや張り合いになっているため、高齢者には重要な活動である。

【事務局】
区は高齢者クラブの活動の助成も行っている。こうした交流の場は皆様の張り合いにもなっているとのことで、区としてもクラブの活動を継続していただけるよう、引き続き支援を行っていく。

【遠藤委員】
シルバー人材センターでは、定年延長などにより入会時の年齢が高くなっており、能力や体力面から就業を続けることが難しい方も増えている。就業を通じた生きがいづくりという観点から、こうした方への支援も課題である。
また、現行計画と異なり次期計画では重点事業が示されていないが、現行計画から変更した理由はあるか。

【事務局】
重点事業は検討中である。皆さんからの意見も踏まえながら、今後議論を詰めていく中で、何を重点事業とするか整理していく。

【八木委員】
「担い手」という言葉は、最初から役割や責任を求める印象があり、参加へのハードルを高める可能性がある。まずは興味を持つ、参加する、継続するという段階を経て、結果として地域を支える存在、「担い手」になってもらう、というながれが現状に即している。

【和気委員長】
介護保険は、地域福祉・地域コミュニティを重視する方向に変化している。その中で、地域住民が高齢者や認知症の問題を他人事ではなく「我が事」として捉え、自ら関わっていくことが重要である。行政だけでなく、社会福祉協議会が地域の力を結集する役割を果たすことも期待したい。

事務局より、今後の日程について説明。（次回会議 10/23（金））

3　閉会
和気委員長の閉会宣言にて終了。